

幾何学形体の具象化による作品制作

小橋圭介

Producing Art Work through changing geometrical design

Keisuke KOHASHI

私は「絵」を描く事が好きだ。

大学でデザインについて学び、就職後は仕事としてデザインに携わってきた。そして今、大学教員としてデザインに関わっている。人に物を教えるという立場に就き、学生と接しながらデザインについて考え、学生の描く作品に触れる中で、「なぜ自分は絵を描いているのか」「なぜ自分は絵を描くのが好きなのか」という疑問が生じてきた。

「絵」を描くという行為が、自分にとっては日常的で、当たり前になっていた為に、このような疑問に今まで気が付かずにいた。もちろん、そのような事を考えなくても、「絵」を描く事はできるだろう。

しかし、私が今いる環境で、その疑問に対し無頓着でいるのはあまりに無責任ではないだろうか。

「描く」という行為は、私の価値観を「絵」で表現する事だと思う。それは、自分の思いを相手に伝えたいという事であり、コミュニケーションの手段が、私の場合は「描く」なのだと思う。

「絵」を描く事や観る事が好きな私が、様々な作品や物に触れる中で与えられてきた感動や刺激を、受けるばかりではなく、今度は自らが発信したい。そのためには、やはり「描く」という行為を繰り返し、自分を十分に表現できるところまで作品の質を高めていくしかないのだと思う。

そこで、色、形、配置、配色等の基礎的な造形力を養う事、見つめ直す事に重点をおき、「絵」を描

く、「創造」という物づくりの原点に立ち返ろうと思った。例えるなら、子供が四角いブロックを自由に組み合わせて、動物やロボットを作って遊ぶようなものだろうか。子供のように純粋に「絵」を描く行為を楽しむ事で、私の中にある「創造」を刺激し、作品へと反映させていく。

今回制作した作品は、「女性」というテーマを設け、女性が持つ優美さやシルエットの美しさを、「線」や「面」で表現しようと試みた。「線」や「面」という、形を作る要素として最も単純な素材を様々な「色」で彩り、それらの素材をどのように組み合わせていけば、本来の美しさを損なわないようにその事物を表現できるかどうか試行錯誤を繰り返しながら、女性の肢体を構成していった。

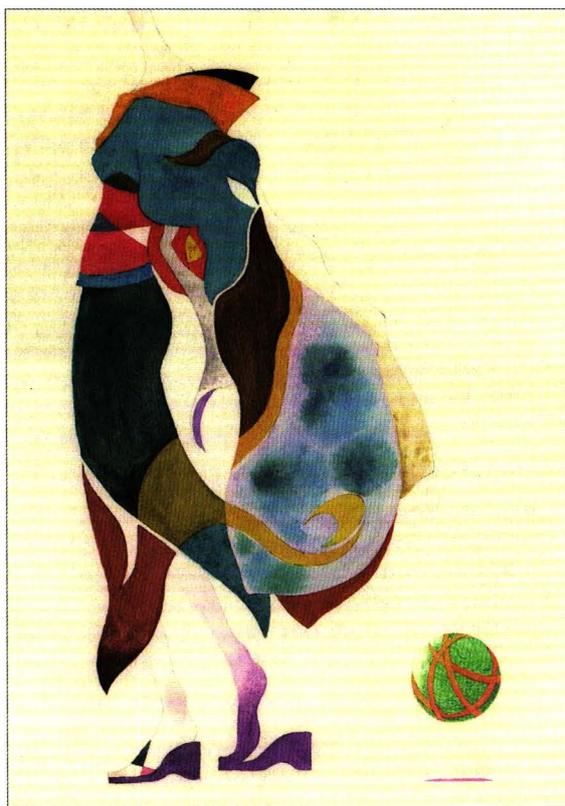
女性特有の体のラインを表現する為に曲線を多様し、衣装のデザイン、装飾などは一度全てをばらして、「線」や「面」で組み立て直し再現した。

衣装や装飾を一度ばらして組み立て直すという行程は、その事物を自分の中でより深く理解する為に必要な事であり、そうする事で形や事物に対する自分の思いや考えを作品に投影させる事ができると私は信じているからだ。今後も、より質の高い作品を追究していきながら作品制作に望んでいこうと思っている。

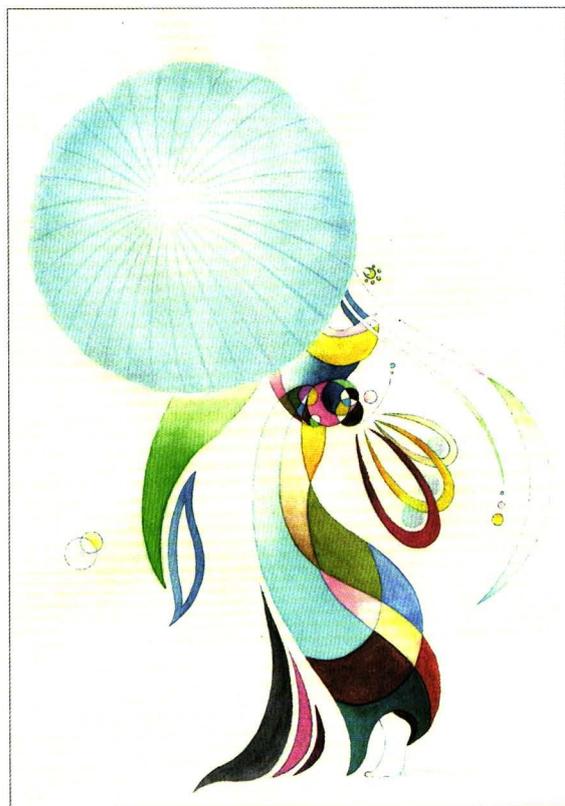
私の発信した思いや考えが、作品に触れた人に少しでも伝わればよいと思う。(P98)

幾何学形体の具象化による作品制作

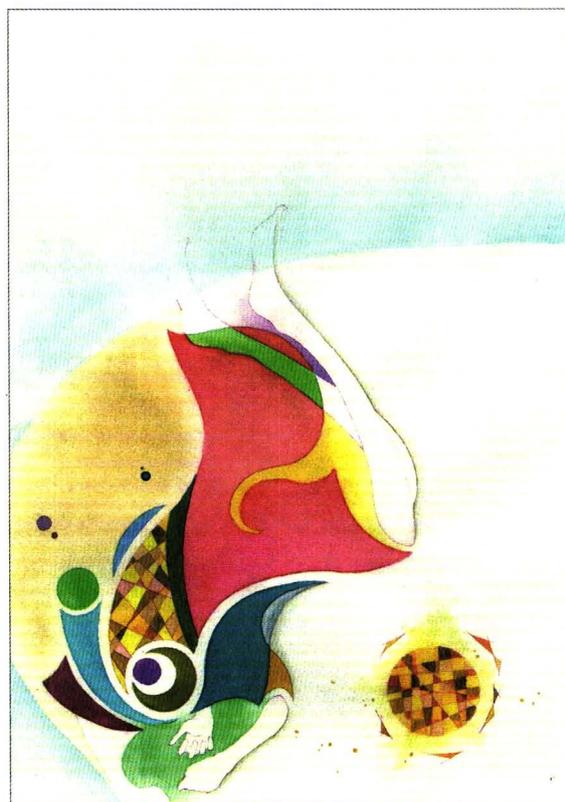
小橋圭介



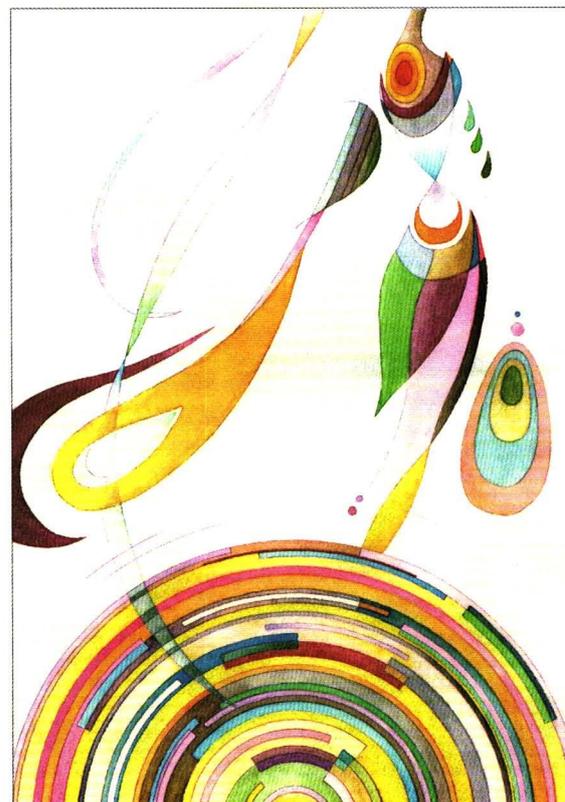
■鞆鈴(マリリン) 2002年 紙に透明水彩 515×364(mm)



■雨音(あまね) 2004年 紙に透明水彩 395×272(mm)



■光廻(ひまわり) 2004年 紙に透明水彩 395×272(mm)



■日輪(にちりん) 2004年 紙に透明水彩 395×272(mm)